

●第一の壁●

迷
い

創業社長の危機

「もしもし、慎介？ お父さんが大変なことに……！」

時間は午前三時をまわっていた。母からの電話に、西山慎介は動搖した。

「オヤジが？ わかつた。すぐ行く。病院は……」

西山慎介は大学院を卒業後、大手家電メーカー日芝へ入社した技術者である。現在、二十九歳。入社以来、設計部に所属し、現在は冷蔵庫やエアコンなどの家電をインターネット回線で結んで情報共有する、いわゆるインターネット家電の仕事についている。仕事はおもしろくて仕方がなかった。つねに最先端の技術や理論にふれることができ、上司も技術者として尊敬できる人たちばかりで、同僚にも優秀な人財がそろっていた。部下も数人任せられ、管理職の卵としても充実した毎日を送っている。

厳しい就職活動のなか、大学時代の友人たちの多くはベンチャー企業に就職を決めた。しかし、慎介は、最初から大企業への就職を希望していた。

——大きな仕事をするには大企業がいい。将来、どのような道に進むにせよ、大企業で学んだことが糧になる。

そう考えていたからだ。

慎介は大企業で、自分がどれだけ通用するのかを試したかった。父親は会社を經營していたが、あとを継ぐという選択肢はまったく目に入らなかつた。

慎介の父・西山隆男は、中堅の金属加工メーカー、西山工業の創業者である。隆男は優秀な技術者だった。地元の高校を卒業後、大手電機メーカーの製造現場で金属加工のイロハを学び、その技術の確かさと豊かな発想力を買われ、三十歳で本社の設計部門へ異動になつた。しかし、一流大学出身の修士や博士ばかりの職場では、高卒の隆男はまったく評価されなかつた。

あるとき理不尽な上司の指示に反発した隆男は、その勢いで辞表を提出した。そして隆男についてきた技術者数人とともに西山工業を立ち上げた。現在は従業員二百名、売上高六十億円の中堅企業である。

売り上げの大半は、隆男が勤務していた会社と取引のあつたカタオカ製作所からの下請け受注であり、比較的安定した業績をあげていた。

——ゼロから会社をここまで成長させてきたオヤジを、一人の起業家として尊敬している。しかし、オレにはそんな才覚も自信もない。

慎介は社会人になつたあと、父親の会社のことを気にするたびに、そう考えていた。

隆男は父親として、慎介に負担をかけないようにとの心遣いからか、小さいころからいつもこういつていた。

「慎介、おまえは、おまえの好きなようにやれ」

隆男は西山工業を自分の代で終わらせるかどうか悩んでいた。勢いで大手メーカーをやめ、部下まで運命とともにさせてしまったが、創業時からの主力社員は、もうみんな引退する年齢だ。

「下請けの金属加工」という事業には将来性もないだろう

と考えていた。

「古い社員も多いし、銀行など外部から外様社長を連れてきても、抵抗が強くてたぶんうまくいかないだろう」とも。

父親の言葉を真に受け、事業承継のことなどにも考えることなく、慎介は大企業の日芝へ就職した。父親の会社とは無関係の人生を歩むつもりでいた。

父親としての「本音」

病院に到着した慎介は、チューブにつながれた父親の姿を見て呆然とした。

——あんなに元気だったオヤジが！

担当医師の診断によると脳梗塞だったが、処置が的確で早かつたため、幸い一命はとりとめたとのこと。しかし、「軽い障害は残るだろう」という。

夜が明けるころ、隆男は目を覚ました。自分がどうなったのかは、病院のベッドで寝ていることで理解したようだ。

病室にいる息子を見ると、

「おう、慎介。元気だつたか？」

と声をかけた。

忙しさにかまけた慎介は、ここのこところ隆男とほとんど連絡をとつていなかつた。隆男が目を覚ましたことですこし安心し、

「元気か、じゃないよ！」

と、ついきつい口調で返事をしたもの、父親との久しぶりの会話に心がはずんだ。

「おい、仕事のほうはどうなんだ？ 前に話していた新しいデジタル録画方式は順調なのか？」

「ああ、あれはなんとか製品化されたよ。いまは次の規格を利用した設計にとりかかつてゐる。今度は世の中が変わるくらいすごいものになるよ」

「そうか、ならない」

「オヤジこそ、工場はどうなんだよ？」

実際、慎介は父親の会社の経営がどうなつてゐるか、まったく知らなかつた。興味がないわけではなかつたが、これまであえて知ろうとも思わなかつた。

「ああ、どうしようか迷つてゐる。これから五年くらいかけてたたむのも、一案だと思う」

「エツ、たたむつて、会社をやめるつてこと？」

隆男の意外な言葉に、慎介は声が上ずつてしまつた。

「そうだ。オレも、もう六十五歳だし、こんなことになつては、もうこれまでのようには働けないだろうしな」

慎介は父親の決断に驚いた。もとより継ぐ気などなかつた西山工業だが、いざ廃業となると、心中、穏やかではない。

「山田さんも、それでいいって？」

山田とは、隆男の元部下で、創業時から苦楽をともにしてきた西山工業の専務、山田章のことである。

「一緒に引退だ。老兵はただ消え去るのみ。ちょっと意味が違うか？　まあ、いいだろう」

慎介は切なくなつてきた。

思えば子どものころ、学校や塾の帰りに、いつも工場に寄つていた。汗と油にまみれて働くごつい男たちが、仕事の厳しさの合間に見せるやさしい雰囲気が好きだつた。そんな西山工業の社員のなかでも、山田は慎介をわが子のようにかわいがつてくれたことを思い出した。

もう一度、聞いた。

「山田さんはほんとうに、それでいいのかな？」

「仕方ないといつてはいる。まだやりたいことがあるようだがな」

そこまでいつて、隆男は目を閉じた。そして、独り言のように呟いた。

「オレもまだ、やり残していることがあるんだよな……」

時刻はいつのまにか、お昼を過ぎようとしていた。慎介には午後から大きな会議の予定があつた。

「また来るよ」

そういうつて慎介は病院をあとにした。

——オヤジは会社をつぶしたくないんだ。

会議の間もずっと、慎介の頭のなかは混乱していた。

その後も慎介は毎日のように隆男の病室を訪れ、これまでの時間を取り戻すかのように親子の時間を過ごした。

倒産の危機を乗り切つたときのこと、社員たちと家族同様に過ごした夏祭りのこと、大

きな受注のさいにトラブルが発生し、納品日まで何日も徹夜したこと……楽しい思い出や最近の苦労話まで、父と子の会話は尽きなかつた。

慎介にとつて、もつとも意外だったのは、西山工業が保有している技術のなかに次世代インターネットの基本技術になるIPv6や無線通信、住宅内の電気配線を利用して通信を行なう電力線インターネットに関するものがあつたことだ。

「工場自動化システムからの応用だ。コツコツと研究は続けているんだよ」

金属加工だけで生き残れるほど生やさしい経営環境でないことはわかつていたが、まさかこんな先端技術に取り組んでいるとは思わなかつた。

——こうやって将来を見据えた開発を進めているのに、病気のために会社をたたまなければならぬなんて……。

慎介は聞いた。

「なあ、オヤジ。次の社長になるような人はいないの？」

「いらないな。おまえは知らないだろうが、オーナー企業の社長を引き受けるというのは大変なことなんだ。とりわけ大きいのは、無限責任を負うということだ」

「無限責任？」